

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Antenatal Pain, Intimate Partner Violence and Maternal Bonding Disorder: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中の痛み、パートナーからの暴力と対児愛着障害の関連について

ユニットセンター(UC)等名: 大阪UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: PAIN

年: 2020 DOI: 10.1097/j.pain.000000000000208

筆頭著者名: 山田恵子

所属UC名: 大阪UC

目的:

妊娠中の痛みが産後うつ傾向を介して産後の対児愛着障害と関連するかを検討すること及び妊娠中の痛みと妊娠中のパートナーからの暴力が産後の対児愛着障害の発症リスクを相互に高め合うかを検討すること。

方法:

妊娠中調査のうち、体の痛みの有無を問う項目、パートナーからの暴力の有無を問う設問、産後1か月調査のエジンバラ産後うつ尺度、産後1年後調査の対児愛着障害スコアを使用して、妊娠中の体の痛みが強いほど、産後抑うつ傾向を媒介して対児愛着障害に至りやすいかどうかを媒介分析で検証した。さらに、妊娠中のパートナーからの暴力が妊娠中の体の痛みの対児愛着障害に対する作用を高めるかどうかを調整媒介分析で検証した。

結果:

妊娠中の痛みは産後うつ傾向を高率に介して産後の対児愛着障害リスクを高めた(産後うつ傾向の媒介効果は70.8%)。また、妊娠中にパートナーから受ける暴力は、妊娠中の体の痛みが産後の対児愛着障害リスクにもたらす効果を高めなかったが、パートナーから受ける暴力は、産後の抑うつ傾向や対児愛着障害の独立したリスクであった。

考察:(研究の限界を含める)

妊娠中に体に痛みがある場合、妊娠前のうつ病歴が高く、妊娠中の心理的ストレスも高い傾向にあり、そうした妊婦では産後うつに陥る可能性が高い。産後うつを経験した女性がその後対児愛着障害に至るリスクが高いことは過去に報告されている。また、体に持続した痛みがある場合、体内のオキシトシン濃度が低下傾向にあることが過去に報告されている。オキシトシンは対児愛着障害に影響するため、本研究結果のメカニズムに関与しているかもしれない。妊婦の体の痛みや産後うつ及びパートナーからの暴力への対策は、対児愛着障害予防に効果的である可能性がある。

結論:

妊娠中の体の痛みは産後1か月の抑うつ傾向を高率に媒介して、出産1年後の対児愛着障害リスクを高める可能性がある。そして、妊娠中にパートナーから受ける暴力は、妊婦の体の痛みが産後の対児愛着障害にもたらす効果を高めはしないものの、独立して産後うつや対児愛着障害のリスクを高める可能性がある。